

行政が核となり幼小連携を推進するための参考資料
(平成30年3月)

平成 29 年度幼小ジョイントプロジェクト ～宇都宮市の取組～



栃木県総合教育センター幼児教育部
栃木県幼児教育センター



幼小連携のさらなる充実のために

子どもの交流活動



先生同士の打合せ



一緒に学校探検



小学校へようこそ



Point!
○ 幼児・児童の双方のねらいを明確にし、互いに学びのある活動を展開しましょう。
○ 年間計画に位置付け、幼稚園や保育所、こども園と小学校が一緒に活動の立案・実施・評価を行うことが望めます。

教職員の相互理解



相互の職場体験



保育・授業の相互参観と協議



合同の研修会



Point!
○ 保育や授業を相互に参観したり体験したりして子どもの発達や学びに視点を置いて話し合おう。
○ 幼稚園・保育所、こども園・小学校の教職員が一緒に研修に参加し、互いの教育について積極的に語り合おう。

連携組織の設置

- 幼小連絡協議会
- 幼小連携推進委員会 等



連携の様々な取組が、効果的に
行われるようコーディネートする
役割があります。

連絡体制の整備



園だよ！・学校だよ！による
情報交換



教育委員会内の使送ボックス
(幼稚園・保育所、こども園宛て)



定期的な情報交換会



Point!
○ 連絡体制の整備は、行政機関が中心となって進めることが大切です。幼稚園、保育所、こども園、小学校が積極的に意向を交換し、地域の特色を生かした組織をつくりましょう。
○ 教職員が互いの顔や名前が分かり、日常的に情報交換をしたり相談したりするなど、定期的・継続的な連携が望めます。



一貫性のある指導計画の作成

伝え合う力を育てるための
年長から一年生へのカリキュラム



入学当初のスタートカリキュラム



Point!
○ 子どもの発達を把握し、見通しを持って指導することが必要です。そのためには、育てたい子どもの姿や、能力などを互いに話し合い、どのような指導かどの年齢で必要が明らかになります。
○ それらを踏まえ、幼児期の「遊び」を充実させ、児童期の「学習」に生かしていくために適切な手立てをカリキュラムに位置付けましょう。

幼小連携を推進することで

子ども

- ☆ 一人一人の発達や学びの連続性が保障されます。
- ☆ 自分や友達の下さに気づき、遊びや学びが広がります。

教職員

- ☆ 子どもの発達段階を知ること、教職員の子ども理解が深まります。
- ☆ 互いの教育を理解することで、自身の教育観が広がります。

保育・授業

- ☆ 幼児教育から小学校教育への滑らかなカリキュラムの接続により、改善・充実が図れます。

栃木県幼児教育センターは、幼小連携
の取組をサポートします。

連携に関する講話・研修・保育及び授業研究会
などにアドバイザーを派遣します。お電話ください。

【連絡先】 TEL 028-665-7215 FAX 028-665-7216
E-mail yoko-yoko-centrochi-edu.ed.jp



目 次

I	幼小ジョイントプロジェクトとは	2
II	平成29年度幼小ジョイントプロジェクトの実際	3
1	概要	3
2	実際	4
	第1回：趣旨説明会	
	テーマ設定	
	第2回：保育公開（認定すずめこども園）	
	第3回：保育公開（宇都宮市北雀宮保育園）	
	第4回：授業公開（宇都宮市立五代小学校）	
	第5回：交流活動	
III	さらなる幼小連携の充実にむけて	12

I 幼小ジョイントプロジェクトとは

幼児期は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な時期であり、義務教育及びその後の教育の基礎となるものです。「栃木県教育振興基本計画 2020 ―教育ビジョンとちぎ―」においては、「幼児教育の充実」を基本施策の一つとして掲げ、その主な取組として「幼児教育と小学校教育の連携の深化・拡充」が示されています。その中に、「市町の教育委員会や保育主管課等との連携を密にし、市町の現状に即した取組を支援し、その成果を県全体に発信する」とあります。

これを受け、幼小ジョイントプロジェクトでは、県内1市町を指定し、年間5日の計画で市町教育委員会や保育主管課と協力して、大学教授等の助言の下、市町の幼小連携を推進します。幼児期から児童期にわたり子どもの発達や学びの連続性が確保できるよう、幼稚園・保育所・こども園・小学校等の教職員が合同で保育・授業を参観し、協議し合うことで、教職員の「子ども観」「教育観」の相互理解を深め、教育・保育の質の向上を図ることを目的としています。

平成29年度は、宇都宮市で実施しました。子どもの交流活動に実績のある市内の1保育所、1こども園、1小学校を市のモデルとし、連携・接続をより深めていく内容としました。第1回の趣旨説明会後、市教育委員会担当者が各園・校の担当者を集め、それぞれの教育観や教育課題を出し合い、「協同性」という幼小をつなぐ共通のテーマを決めました。このテーマの下、保育・授業や交流活動をお互いに公開し、その参観を基に協議を重ねました。「協同性」のテーマから見えてくる保育所の持つ「子ども観」と、こども園の持つ「子ども観」と、小学校の持つ「子ども観」を活発に意見交換し、それぞれの時期に大切にすべきことを共有化してきました。

本資料では、宇都宮市の実践と成果を紹介します。各市町や地域における幼小連携推進の参考にしていただければ幸いです。



Ⅱ 平成29年度幼小ジョイントプロジェクトの実際

1 概要

回	日・会場	内 容
第1回	5／30（火） 五代小学校	〈 趣旨説明会 〉 1 挨拶 県総合教育センター幼児教育部長 森田 浩子 2 プロジェクト参加者自己紹介 3 趣旨説明 県総合教育センター幼児教育部指導主事 黒川 貴広 4 講話「幼小ジョイントプロジェクトに向けて」 宇都宮大学大学院教育学研究科教授 青柳 宏 5 今後の日程調整等
第2回	7／4（火） 認定すずめ こども園	〈 保育公開 〉 1 年長「マーチング～友達と共通の目標を持ち、励まし合いながら～」 2 協議 （1）本日の保育について 認定すずめこども園保育教諭 坪井 悦子 （2）全体協議 （3）指導助言 宇都宮大学大学院教育学研究科教授 青柳 宏
第3回	8／3（木） 北雀宮保育園	〈 保育公開 〉 1 年長「プール遊び・水遊び～意見を出したり、協力したりしながら～」 2 協議 （1）本日の保育について 宇都宮市北雀宮保育園保育士 石川 陽子 薄井 元美 （2）グループ協議 （3）指導助言 宇都宮大学大学院教育学研究科教授 青柳 宏
第4回	11／27（月） 五代小学校	〈 授業公開 〉 1 第1学年生活科「あきとあそぼう」 2 協議 （1）本日の授業について 宇都宮市立五代小学校教諭 及川 貴也 （2）グループ協議 （3）指導助言 宇都宮大学大学院教育学研究科教授 青柳 宏
第5回	1／17（水） 五代小学校	〈 交流活動 〉 1 年長・第1学年・第2学年「年長さんを迎える会」「小学校に行こう」 2 協議 （1）挨拶 県総合教育センター幼児教育部長 森田 浩子 （2）本日の交流活動について 宇都宮市立五代小学校教諭 福田真理子 認定すずめこども園保育教諭 坪井 悦子 宇都宮市北雀宮保育園保育士 石川 陽子 （3）グループ協議 （4）指導助言 宇都宮大学大学院教育学研究科教授 青柳 宏 （5）ジョイントプロジェクトを振り返って 宇都宮市立五代小学校教諭 福田真理子 認定すずめこども園保育教諭 檜山 成美 宇都宮市北雀宮保育園保育士 薄井 元美 （6）今後に向けて 宇都宮市教育委員会学校教育課副主幹・指導主事 吉田 晋

第1回

2 実際

第1回：趣旨説明会（平成29年5月30日）

事業の趣旨や連携の意義について、説明や講話を行った。その後、今後の事業日程について、調整を図った。

○趣旨説明

県総合教育センター幼児教育部指導主事 黒川 貴広

第1回幼小ジョイントプロジェクト（宇都宮市） 幼小ジョイントプロジェクトについて（趣旨説明）  この事業の趣旨や目的等を伝えました。	知ったかぶり、その場に立つ 幼小ジョイントプロジェクトの「幼小」とは？ → 幼児教育と小学校教育の意味です。 ちなみに宇都宮市には、 ・幼稚園 29園 ・幼稚園型認定こども園 2園 ・保育所 76園 ・幼保連携型認定こども園 14園 ・小学校 68校 宇都宮市には、幼稚園・保育所・こども園が121園、小学校が68校あります。	1 幼小ジョイントプロジェクトとは 幼小ジョイントプロジェクトは、幼児期の教育から小学校の教育への円滑な接続が図れるよう、市町教育委員会と県が一体となり、地域の実情に応じた連携を推進する事業です。  幼児期から児童期へ円滑な接続が図れるよう宇都宮市をバックアップします。	就学を境にした子どもの状況 幼稚園 小学校 幼稚園や保育園などの無料学習時間や区で暮らし生活 入学すると生活環境が変わり、1年生は、戸惑いを感じる場合があります。
就学を境にした子どもの状況 幼稚園 小学校 幼稚園の1年生活 小学校の1年生活 下りたくない段差	幼小ジョイントプロジェクトの目的 ○幼・保・こ・小の教職員の「子ども観」「教育観」の相互理解を深め、教育・保育の質の向上を図る。 ○幼児期から児童期にわたり、子どもの発達や学びの連続性を相互理解する。	3 第1回～第5回の方法 ○第1回 趣旨説明会 例えば・・・ ○第2回 保育所公開保育・協議 ○第3回 小学校公開授業・協議 ○第4回 幼保連携型認定こども園公開保育・協議 ○第5回 それぞれの指導方法・指導観を見直す	宇都宮市の子どもたちのために一年間、よろしくお願いいたします。 

本当はできるのに、自分の力を発揮できないこともあります。

この事業の目的はズバリこれです！

公開保育・授業、交流活動を基に協議を重ね、今までの連携をさらに一歩進めましょう。

幼・保・こ・小が一緒になって、宇都宮市の教育を進めていきましょう。

○講話「幼小ジョイントプロジェクトに向けて」

宇都宮大学大学院教育学研究科教授 青柳 宏

【クラスのまとまりとは】

スクールカウンセラーとして、低学年のクラスを見ることがある。出歩く子。まとまらないクラス。「子どもたちも苦しいのだろうな」と思う。力で子どもに言うことを聞かせるのではなく、一人一人が言おうとしていることに気付くこと。それによってつながりが生まれ出す。山崎隆夫「希望を生み出す教室（旬報社、2009）」では、国語の題材「ふきのとう」の中のたった1文でずいぶん豊かなやり取りがなされている。子どもの主体性、自発性が十分に発揮され、クラスがつながっていつている。

【幼稚園・保育所・こども園での体験を授業に生かす】

子ども自身による自然や他者との「対話」を通して、しなやかに物事を受け入れ、新たな自己を作り出していく力を幼稚園・保育所等で身に付けてきている。その柔軟性や修復力などを硬直化させないように、幼稚園・保育所等での体験を小学校の授業でも生かしてほしい。具体的には「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をつなぐこと。

また、一人一人の個性（困難も含めて）をしっかりと受け止めて、見取って、それをどうしていくのかをよく考えること。そこに希望が生まれる。幼小連携は、日本の学びの質を変えていく起爆力を持っている。



テーマ設定（平成29年6月1日）

趣旨説明会を受け、宇都宮市教育委員会の担当者が、認定すずめこども園、北雀宮保育園、五代小学校の担当者と日程調整を行い、各園・校から2～3名ずつの教職員でテーマ設定の場を持った。テーマ設定に当たっては、市の施策方針を参考にしつつ、各園・校の重点課題や年長、第1学年の子どもの姿や目指す姿から考えていくことにした。さらに、趣旨説明会で取り上げた「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」も参考にした。

【「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とは】

平成29年3月に告示された「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」や「小学校学習指導要領」において、学校段階等間の接続が規定され、幼児教育と小学校教育の接続のキーワードとして10項目に示されている。これらの姿を手掛かりに子どもの姿を幼・保・こ・小で話し合い、共有していくことが大切である。

- | | | |
|------------------|--------------------------|-------------|
| (1) 健康な心と体 | (2) 自立心 | (3) 協同性 |
| (4) 道徳性・規範意識の芽生え | (5) 社会生活との関わり | (6) 思考力の芽生え |
| (7) 自然との関わり・生命尊重 | (8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 | |
| (9) 言葉による伝え合い | (10) 豊かな感性と表現 | |

10項目のうち、「協同性」に関する話題が、多く出された。

(3) 協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

○テーマの決定

各園・校それぞれの子どもの姿や目指す姿を挙げていく中で、共通して多く出てきた姿が、「協同性」に集約されるものであった。そこで「協同性」をキーワードに、さらに詳細に共有したい姿を詰めていった。話し合いの結果、以下のテーマに決定した。

このテーマを各回の視点とし、1年間一貫した視点で協議を重ねていくことにした。

ジョイントプロジェクト共通テーマ

友達とのかかわりを通して、協同性を育み、充実感をもってやり遂げるためにこの時期に大切にしたいこと

第2回

第2回：保育公開 認定すずめこども園（平成29年7月4日）

年長全体活動「マーチング～友達と共通の目標を持ち、励まし合いながら～」

指導者：坪井悦子・檜山成美・北條舞・星淳子・安好雄一郎

高山知美・矢口泰子・篠崎節子・茂呂澤朱美・平石晶美

○保育の概要

認定すずめこども園5歳児全員で取り組んでいるマーチング活動を通した保育を公開した。全員が遊戯室に集合した後、パート毎に整列した。全体での練習の前に、毎回パート毎の話合いの場を設け、ねらいの設定や活動の振り返りを行っている。保育者は、できるだけ子ども同士の話合いを尊重し見守るようにしている。



パート毎の話合い



全体練習

○保育を参観しての感想



保育園では、まだまだ養護色が強くなってしまふ。養護と教育のバランスをよりよく取れるように園内で話し合っていきたい。（保育園）

友達と一緒に一つのものを作り上げる過程の中で、協同性が育まれていくことが、今日の保育を通してよく分かった。（保育園）

年長児の持っている力というものを感じさせられた。入学後、甘えてしまふ子どももいるが、年長の頃の気持ちを継続できるようにしたい。（小学校）

子どもに学ばせたいものが職員間でしっかり共通理解されている。それによって子どもが日に日に成長しているのだと思った。（小学校）

○保育を公開しての感想



他園の方に保育を見てもらう機会はほとんどない。様々な意見をもらい貴重な経験となった。（こども園）

自分の保育や子どもとの関わりを見直す良い機会になった。今後の保育に役立てていきたい。（こども園）

○指導助言（宇都宮大学大学院教育学研究科教授 青柳 宏）

- ・強制的ではない形で規範意識が育まれていた。
- ・マーチングを通して育まれている意欲や、自分でやりたいという意思が生活の中に生かされており、教室においても、前向きな態度や返事、挨拶の声の張りにそれが表れていた。
- ・ものとなじむことはとても大切であり、子どもたちがいろいろと試しながら自分の好きな音やその出し方を発見する時間があってもよい。「みんなで合わせること」と「自分はこうしたい」を同時にやっていくことは矛盾しない。これはこの先の（社会での）生活の中でも続いていくことでもある。そのような形にできたら、さらに素晴らしい協同性を育むことになると思う。

第3回：保育公開 宇都宮市北雀宮保育園（平成29年8月3日）

年長「プール遊び・水遊び～意見を出したり、協力したりしながら～」
 指導者：石川陽子・戸崎千絵・薄井元美

○保育の概要

北雀宮保育園の5歳児1組のプール遊び、2組の水遊びの保育をそれぞれ公開した。水着に着替え、水の楽しさ、不思議さを味わった。どちらのクラスも、子ども自身の発見や試みを見守り、保育者が一緒に楽しみながら共感することに留意した。また、子ども同士でつくり上げていく遊びを大切にすると同時に、必要な環境を整え、適切なタイミングで助言や援助を行い、遊びを広げていくようにした。



1組 プール遊び



2組 水遊び

○幼児期の「協同性」について～協議から～

一人一人の自己発揮が、どんどん大きくなつていっていき。

協同性

- ・一人一人の思いが存分に発揮され、遊びが展開し続ける環境を用意する。
- ・遊びの中での達成感や気付きを、他児とつなげていくような援助が大切である。
- ・個々の遊びが、自然なやりとりの中で発展し、一つのイメージを共有したり、一つの方向を決めたりするなど、グループの遊びになっていく。

【入学後大切にしたいこと】

- ・保育者がいなくても子ども同士で解決できることを経験している。小学校の当番活動や話し合い活動でも、そのことを念頭において子どもに関わる。
- ・安心して自分を出せる幼児期の集団作りの方法から、小学校が学ぶことは多くある。一人一人の個性がはっきりと見え、つながりの強い集団を目指す。

○指導助言（宇都宮大学大学院教育学研究科教授 青柳 宏）

- ・子ども一人一人がたくさんの「試し」をしていた。そこから、それぞれの淡い関心が結び付いて、こんなことをしたいという流れが生まれていた点が素晴らしい。
- ・小学校では教師がテーマを決め、問いかける形で課題を提示し、その中でやりとりをしていく。幼児期は自然な流れの中でコミュニケーションが生まれ、関心を共有していくプロセスがとられている。これはコミュニケーションの土台となるものである。幼稚園や保育所等でも5歳児後半にかけて、保育者の問いかけに対し話し合うことも出てくることから、この二つの方法は、はっきりと分けられるものではない。小学校でも授業の中で課題の提示を自然な流れの中で行っていくなど、この二つの方法を統合・関連させながら子どものコミュニケーション能力を育てていくとよい。

第4回

第4回：授業公開 宇都宮市立五代小学校（平成29年11月27日）

第1学年3組 生活科「あきとあそぼう」

指導者：及川貴也

○授業の概要

五代小学校の第1学年3組生活科の授業を公開した。単元「秋の自然物（落ち葉や木の実など）を使ってゲームを作る」で、自分のやりたいゲーム毎に集まり、グループで活動を進めてきた。

本時は、ゲームに対するお客さんの反応を踏まえて、「もっとゲームが楽しくなるようにつくりなおそう」というねらいの下、展開された。各グループで、「話す、試す、直す」ことが繰り返し行われた。教師は、ゲームの「相手」を児童に意識させ、グループでの活動には必要以上に介入せず、見守っていた。材料コーナーは、必要な材料を自由に選び使えるようにしておいた。



自分のやりたいゲーム毎のグループ



材料コーナー

○参観・協議後の感想

【保育園・こども園から】

小学校の授業を見る機会がないので楽しみにしていた。こども園と同じような話し合い場面を見て、その成長ぶりがよく分かった。（こども園）

授業と保育で形は違うが、活発に意見を出したり、じっくり活動に取り組んだり、卒園した子どもたちの生き生きとしている姿がうれしかった。（保育園）

【小学校から】

保育園・こども園からの視点で意見をもらったことは参考になった。幼児期の経験を小学校でどう生かしていくかを考えたい。（小学校）

保育園・こども園の保育者の意見から、小学校の低学年でも遊びの体験を積み重ねていくことの大切さを気付かされた。（小学校）

○協議から見えてきたこと

【一人一人の世界の深まり～グループ協議から～】

- ・自分のやりたいことが、目の前にある環境が大切ではないか。
- ・発言が少ない児童でも、自分のやりたいことをやっているため意見が言えていた。
- ・「自分」を持っていることも大切である。
- ・一人一人が没頭して物事に取り組み、その場を他児と共有することが協同につながるのではないか。
- ・一人でとことん突き詰める姿が協同性に結び付くということ。「どんぐりごまチーム」が教えてくれた。



3班に分かれての協議

【幼児期から児童期への協同性～グループ協議から～】

- ・一人が線を引き、一人が材料を切り、一人が貼り付けるといった協力が自然に行われる姿は、第2回のこども園での子どもの姿、第3回の保育園での子どもの姿が、より磨かれた形で現れたものを感じた。
- ・小学校でも児童は、遊びながら話をしている。遊びを充実させることで話合いが深まってくる。そのような活動があることで、フォーマルな言語活動が生きてくる。
- ・お客さんのために、という相手意識を持たせたことで、「試す」「話す」「考える」ができていた。
- ・この時期に協同性を育むのに、グループの人数を増やしすぎない等、人数の調整をしていく必要があるのではないか。

協同性

「協同」とは、協調や同調ではない。児童のつながりだけを評価するのではなく、一人一人の世界の深まりを見ていく視点が大切。

「自分の考えを話しているか？」

「場を共有しているか？」



どんぐりのコマ回しに没頭する児童

○指導助言（宇都宮大学大学院教育学研究科教授 青柳 宏）

- ・松ぼっくりバスケットのチームでは、意欲的に進める児童がいる一方、活動に入れないでいる児童がいた。ただ、その児童が、自分なりのタイミングと自分なりの判断でグループの活動に入ろうとした時に、他の児童は自然な流れで迎え入れることができ、グループ全員で協同しての遊びが継続していた。このような関係性を築けていることが素晴らしい。
- ・担任教師が、「グループで楽しくやりなさい」ではなく「（先生は）グループで楽しめるようにしたいんだ」という語りかけがよい。子どもたちを受け入れて、「やりたいことをやっていいんだよ」という教師の姿勢が、協同を生み出していたと思う。
- ・一人一人の子どもにとって、協同というものは違っており、それでいい。
- ・自分が何をしたいかという思いを大切にすること。自分と対話してその思いを深めていくことが、協同の基盤になることを感じた。
- ・最後に、青柳教授から質問

「さらに小学校における協同を発展させていくためには、幼児期に何に配慮すればよいか？」

Answer :

ゲームの改善の仕方は、体験からしか浮かばない。豊かな遊びをさらに充実させたい。

北雀宮保育園 薄井元美

生活に必要な道具など、遊びの環境を充実させて興味の幅を広げていきたい。

認定すずめこども園

檜山成美

大人が柔軟な頭で発想を豊かにして、子どもの側に立った学びを提供したい。

五代小学校

佐久間まさみ

第5回

第5回：交流活動（平成30年1月17日）

認定すずめこども園年長・北雀宮保育園年長「小学校に行こう」
五代小学校第1・2学年「年長さんを迎える会」

○事前の話合いについて

2園・1校による交流活動は、この時期に毎年行っている。今回のジョイントプロジェクトを契機に、交流活動が、それぞれの子どもにとってより学びのあるものとなるように、保育園・こども園・小学校の事前の話合いを充実させることにした。そこで、今まで、それぞれに作成していた交流活動の計画を2園・1校共同で作成する以下のような様式に変更した。この様式により、交流活動におけるそれぞれの目標を互いに念頭に置き、活動を進めることができた。また、一つの活動案にまとめたことから、事前の話合いもより活発化するという成果があった。

○本時の目標・ねらい			
・幼児にやさしく接し、相手のことを考えて行動することができる。（小学校） ・小学生との触れ合いを楽しみ、入学への期待を高める。（幼稚園） ・小学生と触れ合い、学校の様子を知ることで、入学への期待を高める。（保育園）			
○本時の展開			
時間	教師の支援（小学校）	幼児・児童の活動	保育者の支援（幼稚園・保育園）
10:40	・児童のめあてを確認し、本時の活動への意欲付けをする。 ・事前に役割分担や座編成しておく。 ・1年代表児童が、はっきり言えるように支援する。	○学年や幼稚園、保育園ごとに体育館に整列し、準備をする。 1 年長さんを迎える会 全体始まりの会を行う。 ・進行・言葉は1年代表児童	・並んで安全に移動できるようにする。 ・必要ならトイレに行くように促す。 ・事前に座編成しておく。 ・緊張している子には安心するような言葉掛けをし、きちんと並べるように援助する。 ・興味をもって話を聞けるように支援する。
10:45	・年少者のことを考え、思いやりをもって活動できるように支援する。 ・自分が年長のときを思い出させ、どのようなことが知りたいかを考えさせながら活動できるように支援する。	2 幼稚園・保育園の園児は2グループに分かれ、それぞれ1年生、2年生と活動する。 1年生と一緒に 2年生と一緒に ・班ごとに1年生の案内係 ・体育館で3～4人のグループになる。 ・1年生が園児に小学校の ・2年生と一緒に特別教室の学校探検を行う。	・元気に挨拶や返事ができるように言葉掛けをする。 ・1、2年生の指示に従ってスムーズに動けるよう個別に言葉掛けをしていく。 ・学校探検では静かに並んで歩くことや、学校の展示物等に勝手に触れないことを事前に伝え、見守っていく。 ・教室では小学生の話をよく聞いて、学校生活への興味や関心が高まるよう働きかける。 ・探検をしながら小学校生活に期待がもてるように言葉掛けをする。
11:10	・自分が受け持った役割を、自信をもって行えるように支援する。 ・同じことの繰り返しでも、丁寧に行うように言葉掛けをし、よりよくできるように支援する。	3 体育館に戻り、グループの交換を行う。 ・小学生は同じことをもう一度行う。	・安全に挨拶や返事ができるように言葉掛けをする。 ・安全に気を付けて園まで戻れるように援助する。
11:35	・2年代表児童が、はっきり言えるように支援する。 ・本時の活動の感想を児童に質問し、振り返りをさせる。	4 体育館へ集まり、全体終わりの会を行う。 ・進行・言葉は2年代表児童 ・幼稚園・保育園生はそれぞれ園に戻る。 5 小学生は各クラスに戻り、活動の振り返りをする。 ・発見カードの記入	・安全に気を付けて園まで戻れるように援助する。 ・園に戻り小学校で活動してきたことを振り返り、みんなで話し合う時間を持つ。

○交流活動をより充実させるために～「協同性」の視点から～

▶ 大好きな遊びから自然な関わり（教えたい、知りたい）が生まれる。触れ合いの中で、子どもは多くのことを学ぶ。

今回は、子どもたちの思いよりも、教職員側で活動を決めてしまうことが多かった。

▶ 準備したやりとりだけでなく、自然な会話（インフォーマル）を大切にする。教職員が意図しない場面で深まる学びがある。

今回は、教職員が与えた目的意識、相手意識の下、子どもたちは、役割をこなしていた。

幼児期の

豊かな遊び

子ども主体の活動

の要素をもっと交流活動にとり入れる。

○指導助言（宇都宮大学大学院教育学研究科教授 青柳 宏）

【本日の交流活動について】

- ・1年3組では、事前に用意したプログラムが終わったあと、余った時間で、「どんな給食を食べているか」の話題で盛り上がった。その場でぱっと出てきた質問であったが、子どもたちの思いが重なった場面だった。このような場面は丁寧につないでいきたい。自然な関わりは素晴らしい。関わりが随所に生まれることが求められる。
- ・事前に決めておいた台詞が詰まり、沈黙が起きたときに、周囲の児童が次を促す助け合いが生まれた。すてきな関係性だと感じた。
- ・交流活動の本質は、子ども同士が一緒に何かをすること。遊ぶこと。触れ合うこと。
- ・保育園、こども園、小学校の教職員が、交流を重ねるごとに、「今後はこうしてみたい」と率直に言い合える関係になれば、さらに活動がよくなっていく。



楽器を介して関わる子どもたち

【協同性について】

- ・子どもから出てきた疑問を丁寧に扱い、つなげることは、協同性を育むことにつながる。
- ・協同を自分の研究テーマにしてきた。なぜ協同を強調してきたかという、日本の教育は世界的に高く評価され学力は高いが、学びに向かう意欲は低いからである。中・高・大学生が社会に関わる意欲が低い。
- ・今回の学習指導要領等の改訂は、大学の入試改革を伴ったことが大きい。主体的に解決を導く問題が増える。入試が変わると高校教育も探究を重視する方向に変わる。
- ・小中でも探究のプロセス、学んだ知識を活用する・生かすことを重視するようになる。教科毎に区切って、知識だけを注入するのではない。教科横断的に何かにぶつかり、子どもたちが考えて、誰かと、何かと関わっていく。このことは生活科ではかなり以前からやってきたことだが、これが全ての学年、教科へと広がっていく。
- ・子どもたちの「関わる力」を育てていく。幼小連携はその根っこであり、子どもたちの学びをより主体的で豊かにしていく。それは、日本の教育改革にまっすぐにつながっている。

○ジョイントプロジェクト全5回を振り返って

宇都宮市五代小学校教諭 福田 真理子

場所は近いが、ここまで深い話し合いは、なかなかできずにいた。保育園、こども園での子どもたちの様子がよく分かり、よい機会であった。

認定すずめこども園保育教諭 檜山 成美

ジョイントプロジェクトでは、毎回新鮮な発見があった。そのことを生かして、保育をしていきたい。

宇都宮市北雀宮保育園保育士 薄井 元美

協議をたくさん重ねたことがよかった。こども園、小学校の教員と今後も話し合える関係ができた。



それぞれの立場から、子どもを語る

Ⅲ さらなる幼小連携の充実に向けて

今年度の宇都宮市のジョイントプロジェクトは、「協同性」をテーマとしました。「協同性」は、どの年齢の子どもにおいても多くの教職員が大切にしている視点でしたが、「協同性」の持つイメージは人によってそれぞれ微妙に違うことがジョイントプロジェクトを通して分かりました。その違いは、保育所－こども園間、幼児期－児童期間、そして校種を超えた個人間にも見られました。その違いを各回の子どもの姿と照らし合わせて、率直に語り合い、「協同性」というものを深く捉え直す作業の積み重ねこそ、今回のプロジェクトの大きな成果であったと思います。

幼小接続期の「協同性」についての語り合いを通し、新たに気付いたことを明日からの自分の保育や授業に反映する実践は、まさしく幼小のカリキュラムを接続するという試みに直結するものです。是非、今回築き上げた保育所、こども園、小学校の関係を保ちながら、この実践を積み重ねていってほしいと願います。

今回のプロジェクトが、一つのテーマを深く掘り下げることで、日々の保育・授業を改善し、子どもの学びを最大限に高める幼小の接続のモデルとして、宇都宮市全体にも広がっていくことを期待します。

最後に、幼小ジョイントプロジェクトに熱意をもって取り組んでくださった認定すずめこども園、宇都宮市北雀宮保育園、宇都宮市立五代小学校の皆様にも深く感謝申し上げます。

宇都宮市教育委員会学校教育課 吉田 晋 副主幹・指導主事より

五代小学校、認定すずめこども園、北雀宮保育園の先生方には5回の幼小ジョイントプロジェクトではお世話になり、誠にありがとうございました。今回、ジョイントプロジェクトを実施し、五代小学区では、先生方の連携がとられ、幼小連携において模範となる地区であることを感じました。

協議会では、回を重ねるごとに協議が活発になり、小学校、こども園、保育園の先生方の相互理解が深まってきたと思います。今後さらに、今回のジョイントプロジェクトの内容を、保育・授業に生かしていただけると幸いです。

現在、宇都宮市では、市内の68小学校区において、それぞれの学校区の実情に応じて、幼稚園・保育園・こども園と小学校の連携を図る諸活動を行う幼保小連携事業を推進しているところでありますが、今後、今回の五代小学区での取組を一つの模範的なモデルとして参考にし、さらに幼小連携の推進を図っていきたいと思います。

1年間、大変お世話になりました。ありがとうございました。



地域で取り組む「幼小連携事業」の参考にしてください。

行政と幼・保・こ・小の教職員が一体となって、栃木県の幼小連携を推進しましょう！

